

説明文におけるJSL児童の理解困難語とスキヤフォールディング

—日本語学習歴の違いに着目して—

岡田 美貴 (福岡市立城浜小学校)

1. 研究の背景と課題意識

文科省の調査(2019)によると、日本語指導を必要とする児童生徒数は、5万人を超えているが、日本語を第2言語として学ぶ児童(Japanese as a second language: 以下JSL児童)は、教科学習に困難を来している者も少なくない。日本語指導に携わった経験から見て、読解力の育成が急務と思われるが、それは理解困難語の多さに阻まれている。

茂木(2013)によると、国語科におけるつまずき言葉は、子どもの日常からの遠近や教科の固有性などから分類されているが、日本人児童を対象としたものであり、教師が選定した語彙であることから、JSL児童を対象としたつまずきの研究が求められている。また、中石・建石(2017)によれば、中国ルーツの小3児童のつまずきの研究を行い、優位な言語による違いがみられたということである。しかし、JSL児童はルーツや学習歴などが多様化しており、対象を広げてつまずきの研究を行う必要があると思われる。

2. 研究の目的

そこで、JSL児童の学習歴の違いによって、説明文教材における理解困難語の様相ならびにそれらに対するスキヤフォールディング(以下Scf)にどのような違いがあるかを明らかにすることを目的として本研究を行った。

本研究においては、「理解困難語」を文脈上の理解が難しく何らかの支援を必要とする語と定義し、初読の段階で児童自身にマーキングさせた語ならびに音読時のつまずきから意味がつかめていないと教師が判断した語とした。また、Scfとは、独力ではできないことに対する「知的な支え上げ」であり、自律した学習者育成をめざした支援である(ハモンド2009)。本研究においては、文部科学省「JSLカリキュラム(中学校編)」の「理解支援」の11項目(言い換え・視覚化・例示・比喩・対比・明示・簡略化・整理・補足・関連付け・既有知識の活性化)をScfとして認定した。齋藤(2009)によると、JSLカリキュラムは、在籍学級への「橋渡し」としての役割を付されているとされていることから、この項目を援用した。

3. 研究の方法

3.1 対象児童

【表1 対象児童のプロフィール】

	学習歴が短い児童(3名)	学歴が長い児童(8名)
ルーツ	中国・韓国	中国・ベトナム・エジプト・インドネシア・リビア・モロッコ・ペルー
学年	3年・5年	3年・4年・5年
学習歴	1年半	2年半～5年

3.2 研究の手順

- 1) 5編の説明文教材(光村図書以外の国語科教科書2年～3年から選定)を読ませた。
- 2) 読後の教師とのやりとりを録音したデータから理解困難語とScfを抽出・分析した。
- 3) 日本語能力試験N4レベルの読解問題をプレ・ポストテストとして実施した。

4. 結果と考察

4.1 理解困難語について

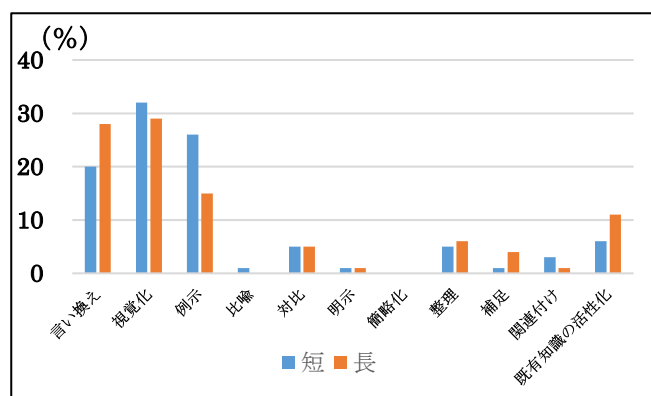
【表2 理解困難語数】

	短	長	共通
名詞	47	25	18
動詞	38	25	12
形容詞・副詞	9	10	5
文法事項	12	4	1
合計	106	64	36

理解困難語の総数は、異なり語数で学習歴の短い児童が106、長い児童が64であった。表2によると、学習歴が長くなると、名詞や動詞、文法事項の理解困難語は、少なくなる傾向が見られる。これは、教科学習によるところが大きいと考えられるが、一方でかなりの数の共通した理解困難語があることも分かった。「どうも～そうだ」という呼応の副詞や「たどり着く」などの複合動詞を挙げていることは学習歴が長い児童に特徴的である。

4.2 スキャフォールディングについて

行った Scf の総数は、学習歴が短い児童に対しては191、長い児童に対しては143であった。グラフ1によると、学習歴が長い児童の場合、「言い換え」や「既有知識の活性化」の Scf の割合が高かった。これは、理解語彙が増えて日本語での言い換えが可能になり、また行事等の既習経験を生かした Scf が多く使われたためと考えられる。一方、学習歴が短い児童の場合、「例示」の割合が高く、多様な例を挙げながら帰納的な理解を図ったためと思われる。また、学習歴に関わらず「視覚化」の割合が高いことは、視覚資料の必要性を裏付けるものである。



【グラフ1 Scfの項目別割合】

5. まとめ

対象児童11名中9名のポストテストの結果がプレテストを上回っていた。また、「分からない言葉があっても挿絵を見たり、先を読んだりすると分かる」などの事後アンケートの記述からも徐々に「足場」が外れていった姿も見いだせた。しかし、今後さらにデータ数を増やして傾向を明らかにしていく必要があるとともに、接続詞や指示詞に対する Scf の研究を進め、文章構成をつかんだトップダウンの読みができる支援方法を探りたいと考えている。

【引用文献】

文部科学省 (2019) 「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査 (平成30年度) の結果について」 https://www.mext.go.jp/content/1421569_002.pdf (2020/02/16 閲覧)

茂木俊伸 (2013) 「小学校国語教科書における「つまずきことば」の分析」『鳴門教育大学研究紀要』28巻

中石ゆうこ・建石始 (2017) 「中国にルーツを持つ小学3年生のつまずき—子どもにとって優位な言語による違いに着目して—」『県立広島大学総合教育センター紀要』第2号

Jennifer Hammond (2009) 「スキャフォールディングの実践とその意味」『「移動する子どもたち」のこぼの教育を創造する—ESL教育とJSL教育の共振—』、ココ出版

齋藤ひろみ (2009) 『学習参加のためのこぼの力』を育む『「移動する子どもたち」のこぼの教育を創造する—ESL教育とJSL教育の共振—』、ココ出版